2025年度入学者 一般選抜 後期日程 試験問題

群馬県立女子大学 文学部 文化情報学科 小論文

試験時間は、60分です。中途退室は認めません。
途中で気分が悪くなった場合は、黙って手をあげてください。

問題は2問、問題用紙はこの表紙を含めた 10ページ(最後の白紙部分は下書き用)です。
解答用紙は2枚です。横書きで記入してください。さらに下書き用の紙(白紙)を1枚配ります。

それぞれが配られたら、指示に従って、各解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入してください。
試験開始の合図があるまで問題用紙の表紙をめくって問題を見てはいけません。

問　題

問１

下の図１は、2013年以降の日本における国籍別外国人労働者数の推移を示したものである。図１から読み取れる変化について説明しなさい。また、それが地域社会にどのような影響をもたらすか、具体例を挙げた上で、その影響に対するあなたの考えを論じなさい（500字以内）。

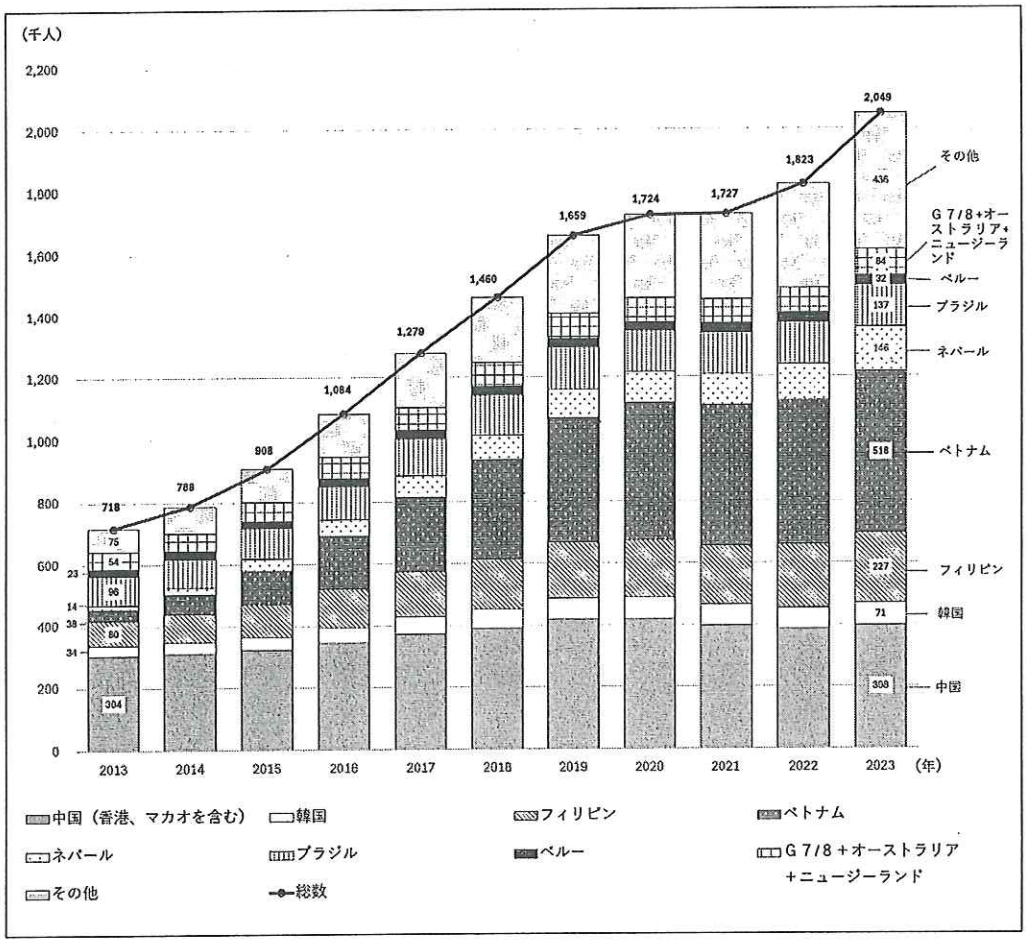

図１　国籍別外国人労働者数の推移

出典：厚生労働省「外国人雇用状況の届出状況」（各年10月末現在）から作成(出題者注1)。

【出題者注】

（1）このグラフでは、G7とはフランス、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、カナダ、であり、G8はさらにロシアが含まれる。

問２

以下の文章は、私たち人間が、複雑なプランを立てて問題解決を行う能力について述べたものである。問題解決をするために重要な能力とはどのようなものであり、現在から未来へ向かう私たちにどのように関わっているのか、本文を読んで筆者の考えをまとめたうえで、具体例を挙げてあなたの考えを論じなさい（500字以内）。

日曜日をどう過ごすか

さきざきの目標を達成するために、私たちはプランを立てる。先の目標というのは、何十年先の自分の生活のことでも、（中略）、今日一日の間にやりたいことでもよい。とにかく、複雑なプランが立てられること、この能力こそが、私たち人間の問題解決の仕方を動物のそれと隔てているのだ。

では、私たちのプランの立て方にはどんな性質があるのだろうか。実は、プランについての心理学的研究は、一九六〇年に出版されたアメリカの著名な心理学者ミラーらによる『プランと行動の構造』という本ではじめて体系化されたのだけれども、それ以来研究のベースとなってきたひとつの概念に、「再帰構造」という概念がある。ここでは、プランの再帰構造について簡単な例を用いて説明しておこう。

さて、明日は日曜日――久し振りの休日だ。さきほどの、テニス・クラブから修理工場までの一日と違って、やることがたくさんたまっているわけではない。

明日一日を有意義に過ごせさえすればそれでよい。そこで、明日を有効に過ごすというひとつの目標を達成するために、プランを立てることにしよう。

まず、午前中は部屋の掃除をし、午後は友達と映画に行く。夜は読みたかった本を読む。これで一応大まかなプランはできた。ここで、部屋の掃除とか映画とか読書が、明日を有効に過ごすという目標を達成するための「手段」になっていることに注意していただきたい。

ただ、掃除をする、あるいは映画に行く、本を読むというのは、それぞれひとつの「手段」であると同時にまた、ひとつの「目標」でもある。というのは、掃除なら掃除をすることは、まず部屋を整理する、窓を開ける、掃除機を取り出すといった一連の行為によってはじめて達成できるから。そして、この、部屋の整理とか、窓を開けることとか、掃除機を取り出すことなども、それぞれが掃除をするという目標を達成するための「手段」であり、また同時に「目標」でもある。

ことばで言うといかにもしつこいけれども、図 2 をごらんいただければ、プランの基本的な構造がおわかりになると思う。要するに、プランというのは基本的に、目標の中にまた目標、その中にまた目標という具合に、目標が入れ子になっている。また、入れ子の内側にある目標は、外側の目標を達成するための手段になっているというわけだ。

このような、内側の構造が外側と同じになっているような入れ子構造のことを、ふつう「再帰構造」と呼んでいる。さきほども言ったように、プランの研究では、この再帰構造を軸として、最近に至るまで、きわめて細かい理論化が行なわれてきている。

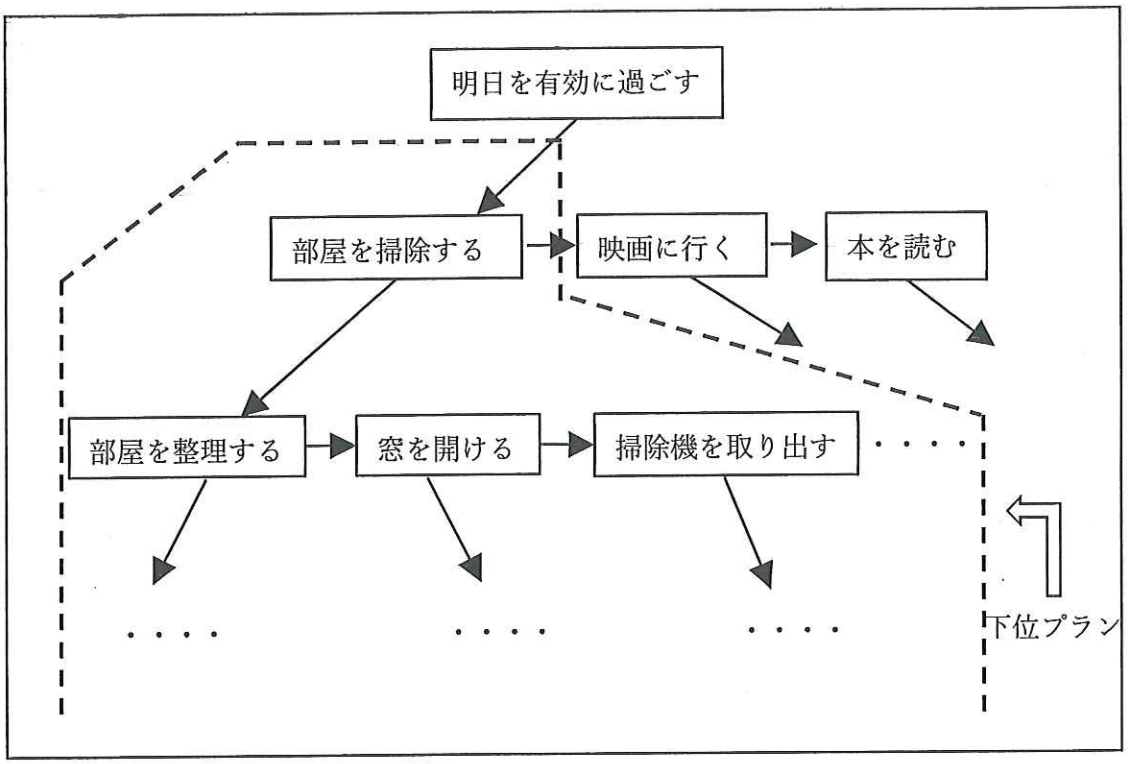

図２「明日を有効に過ごす」ためのプランにおける目標の再帰構造

ここではそういう細かい話はさておいて、私たちにとって一番大切な点だけを指摘しておこう。

それは、手段を目標とみなして再帰的にプランを立てられるという私たちの能力が、「手段―目標」の関係をいくらでも、しかも再帰性という簡単な構造でもって、拡げてゆけることを保証しているのだ、という点である。この能力のおかげで、私たちは、例にあげた明日一日のプランだけに限らず、遠い未来の目標を実現するために現在何をするべきか、考えをめぐらすことができるのである。

しかも、この「手段―目標」の再帰構造をつくる能力というのは、第三章の「因果的思考」のところで言った、「原因―結果」の一貫した構造をつくろうとする私たちの傾向と、表と裏の関係にある。言いかえると、すでに起きたできごとを「原因―結果」の関係で理解しようとする私たちは、同じように、将来起きてほ

しいできごとを、「手段―目標」の関係によって現在の自分と結びつけるのだと言ってもよいかも知れない。

船の操舵(そうだ)と文章を書くこと

一日のプランを立てるときには、前もって立てたプランがその一日ずっと通用すると思っていると言ってよいだろう。しかし、現実はそう単純ではない。プランどおりにことを運ぼうと思っても、まわりの状況の方が変化してしまい、せっかく立てたプランを途中で変更しなくてはならなくなる。そういう場合がむしろふつうだろう。私たちのプランの立て方は、実は状況に依存している部分が大きいのだ。

このプランの状況依存性についてはあまり多くの研究がないのだけれども、問題解決者としての人間を考えるときにはきわめて重要なので、ここで簡単に触れておくことにしたい。

ひとつの例として、船が決められた針路を航行するときの操舵の問題を考えてみよう。

いま、あなたは十万トン級石油タンカーのブリッジに立って、自ら舵(かじ)を握っているとしよう。長旅を終えて日本に戻ってきたが、これからが正念場、港にはいる前に、浅瀬が多く幅の狭い海峡を通過しなくてはならない。あなたの腕の見せどころだ。実際には港の近くでは専門のパイロットが乗りこんで舵をとるのだが、ここではまず、そういう専門家がいなかったとしよう。

あなたにも、船の操舵の経験や知識が少しはあるかも知れない。しかし、その程度では、もし大型船舶の経験がまったくなかったら、まず絶望だ。船の針路の予測を誤って、どこかの浅瀬に座礁して翌日の新聞をにぎわすこと間違いない。というのは、大型船舶の場合、舵をとってから実際に船が方向を変えはじめるまでにはかなりの時間がかかるからである。止めようとしたところで、なかなか止まらないのだ。こういうことをよく知らない人に向かって、航路をどうとってゆくか大局的なプランを持てといっても無理な話なのである。

これに対して、もしあなたが大型船舶のベテラン・パイロットだったらどうだろうか。たぶんあなたは、全体の航路について粗いプランを立てられるに違いない。そして、大局的にはつねにそのプランを基準としながら、刻々変わるその場の状況に応じて臨機応変に局所的なプランを立てることができるだろう。

つまり、ベテランのプランは、状況の変化に即座に対応できるような下位レベルのプランと、問題全体を見渡して、解決の方向を決める基準となるような上位レベルのプランの二重構造になっている。そして、このことによって、刻々と変わる状況に対応しながら、大局的には自分の決めたとおりに問題解決を進めてゆくことができるのである。

安西祐一郎『問題解決の心理学――人間の時代への発想』(中央公論新社、1985)

※ 出題にあたって、一部表記を変更した。

下書き用